

3/11

惟然坊句集

258
247

特52
283

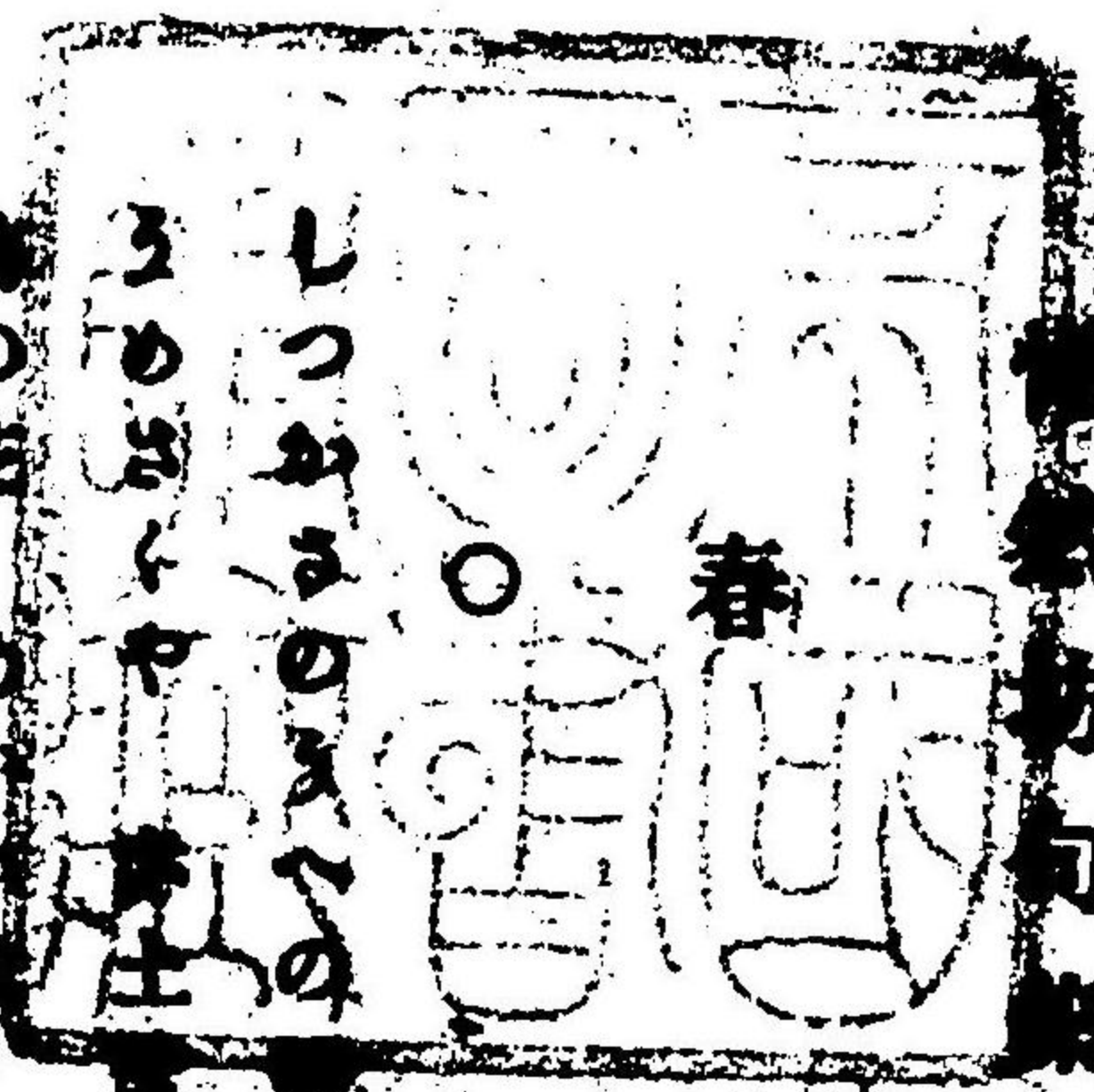


惟茶坊句集



惺然坊句集原序

梅花烏落人惺然坊は、美濃國關里の産、廣瀬氏、安通が舍弟なりけり。
ある夕、庭前の梅花時ならずし鳥の羽風に落ち散るを感動してより、頻りに隱遁の志起りて止まず、ある夜妻子を捨て、自ら蓬髮して芭蕉門にかけ入り、吟徒となりて晝夜をわかず俳諧三昧にして終に此道の大眼悟徹を達せたり。翁遷化後、師として随ふ可き人なく、友として親しむものなしとて、風羅念佛といふものを作り、古き瓢をうちならし、飄ひ風狂して足のゆく處に走り、足の止まる所にとゞまりて、心のまゝに身の天然を終れり。まことに世に奇々たる風骨の好もしまり、わが旅寐の暇々、かの烏落人の句々奇事奇談、目に見耳に觸れたるほどのかずく書集め、一巻となしたるを、關里巴圭が勸めにまかせて、一巻の紐解て、一編の冊子とはなしぬ



梅の花

しつおまのまのや 梅の花

うめさくや 梅の花

梅の花 あかいはな

梅書

梅の花 あつ月ながら折らばやな

人日

芹なつな 踏みよごしたる雪の泥

風呂敷へ 喜ちよ包まん舞ふ雲雀

山のはゝ 啼き渡りけり雉子の聲

山吹や 水にひたせるあまし姿

まだ山の味おぼらんねど松の花

○
花ももふすこしの分おまたなんば

斯う居るも大切な日ぞ 花盛

我まゝに散るなど花の匂をさらり

酒都屋に 琴の音せよ葱の花

○
今日と云ふ今日この花のあたゝかさ

馬の尾に陽炎ちるや晝烟草

出羽にて

しとやかな事ならはらかな田うち鶴

新壁や 暮もかへさぬ軒の梅

宗鑑の陳蹟を尋ねて

梅散て 観音草の道の奥

謝靈廟

如月や 松の苗うる松の下

乙鳥や 赤土道のはねあがり

鳥散らすくれ木の中や雉子の聲

菜の花のはひや庵の礎石

文臺に 扇ひろくや花の下

夏

○

若葉ふく風さらくとなりながら

於知足亭 名所夏

涼まうか 星崎とやらさて何處じや

澤水に米ほうはらん燕子花

燕子や 其かしこさに美しき

夕顔や淋しうすこき葉のならひ

糊こわな種子かふる晝寝かな

追善

遠つかん藤もやわてそ夏月

故郷の空なわめやう

あれ夏の雲又雲のわさなれば

四日市にて

涼しさよ 饅頭喰ふて蓮の花

無花果や廣葉にむかふ夕すゝみ

竹の子によはれて坊の時鳥

尊菜や 一鎌入るゝ浪のひま

川風涼しき橋板に露して

涼しさや海老のはね出す日の曇り

芭蕉翁杖卓に行脚のころ
墓ひ侍りて

見せはやな茄子、をちさる軒の露

遺問

鶉鳴や 柱踏おる紙帳ごし

玉江

賣はうよ 玉江の妻の菊仕舞

○ 秋

夏け行くや水田の上の天の川

七夕や 先つ寄り合ふて曙初

はり残す窓に鳴入るいと、哉

○ 菊に出て奈良と難波は露月夜

○ 近附になりて別るゝ案山子哉

○ 鏡百のちがひか出来た奈良の菊

此冬の寒さも知らずで秋の暮

栗津にて

今ならは落ちはなされし田刈時

道盡の底のぞかん今日の月

なほ月に知るや美濃路の芋の味

奥の細道

萩枯れて奥の細道とこへやら

田の肥の藻や蒔よする磯の秋

物干にのひたつ梨の片枝かな

朝露にいさり車や草の上

伊賀の山中に阿波の

閑居を訪ふて

松茸や 都に近き山の味

湖邊

八景の中ふきぬくや秋の風

我寺の藜は杖になりにけり

風さむき初めに赤し蕎麥の莖
世の中を這入かねてや蛇の穴
霧と坂の下にて別るゝとて
別るゝや柿喰いながら坂の上

○ 冬

何事もこさらぬ花よ水仙花
水仙の花のみたれや葦屋敷

木枯や刈田の畔の鉄氣水
鞠の糞の白き梢や冬の山

しかみつく岸の根笹の枯葉哉
鶯や霜の梢になきわたり

○

水草の葉ににまかれんうす水
茶をすゝる桶屋の弟子の寒さ哉

はつ霜や小笹か下のぬひ憂
冬川や木の葉は黒き岩の間

燕鶯病中新鷹の句

足はやに竹の林やみそさゝの

看病

ひきはりて滑圓そ寒き笑い聲

於義仲寺六七日

花鳥にせかまれつくす冬木立

越路にて

静もわらん宿かせ雪の静さは

あそびやれよ遊ばそ雪の鶴者達

有千斤金不如林下貧

ひだるさに馴てよく寝る霜夜哉

水さつと鳥はふはくふらはく
水鳥やむかふの岸へつうい〜

李錦汁は宗因か酒客

奈良茶漬は芭蕉か清貴

冬こもり人にも云ふ事なわれ

臘入や今朝羅炊の蕪の味

焦揚やとしき一枚ふみくたく

節季候や壘へ鶏を追ひあげる

天鵝毛の財布さかして年の春

年の雪 故郷に居てもものゝ旅

尋元政御師塚

竹の葉やひらつく冬の夕日影

曾禰松

曾禰の松これも年ふる名所かな

俳文

賞讃

いにしへより、富めるものは世の業も多しとやらん、
老夫うらの安楽山に隠れて、喰はす食樂の誌に遊ぶに、
地はもとより山畑にして茄子によろしく、顔によろ
し。今は十とせも先ならむ、芭蕉の食の美談行脚に

見せはやな茄子をちぎる軒の畑

と招隱の心を申つかはしたるに

その業を空にやらん夕顔

と其の文の回答ながら、それを繪に書きてたひけるが、
、今更草庵の紀念となして、繪はた茄子夕顔につちか
ひて其賞樂に遊ぶなりけり。さて我山の東西は、木曾
伊吹をいただきて郡上川其間に横たふ。ある日は晴奴
雨奇の吟に遊び、ある夜は輕風淡月の情を盡して、孤
燈とも枕を並べてん、云はすや道を學ぶ人は先つ賞を
學ぶべしと世に亦賞を學ぶ人あらははやく我會下に來
りて手鍋の功をつひべし、日用を消さむに經行靜座も
さらひなくは、薪を拾ひ水を汲めとなむ

明治四十年十月廿二日印刷
明治四十年十月廿四日出版

(定價金十二錢)

編輯兼
發行人 東京市神田區台所町拾一番地
木下子之吉

印刷人 東京市神田區三崎町三丁目一番地
平井勝治

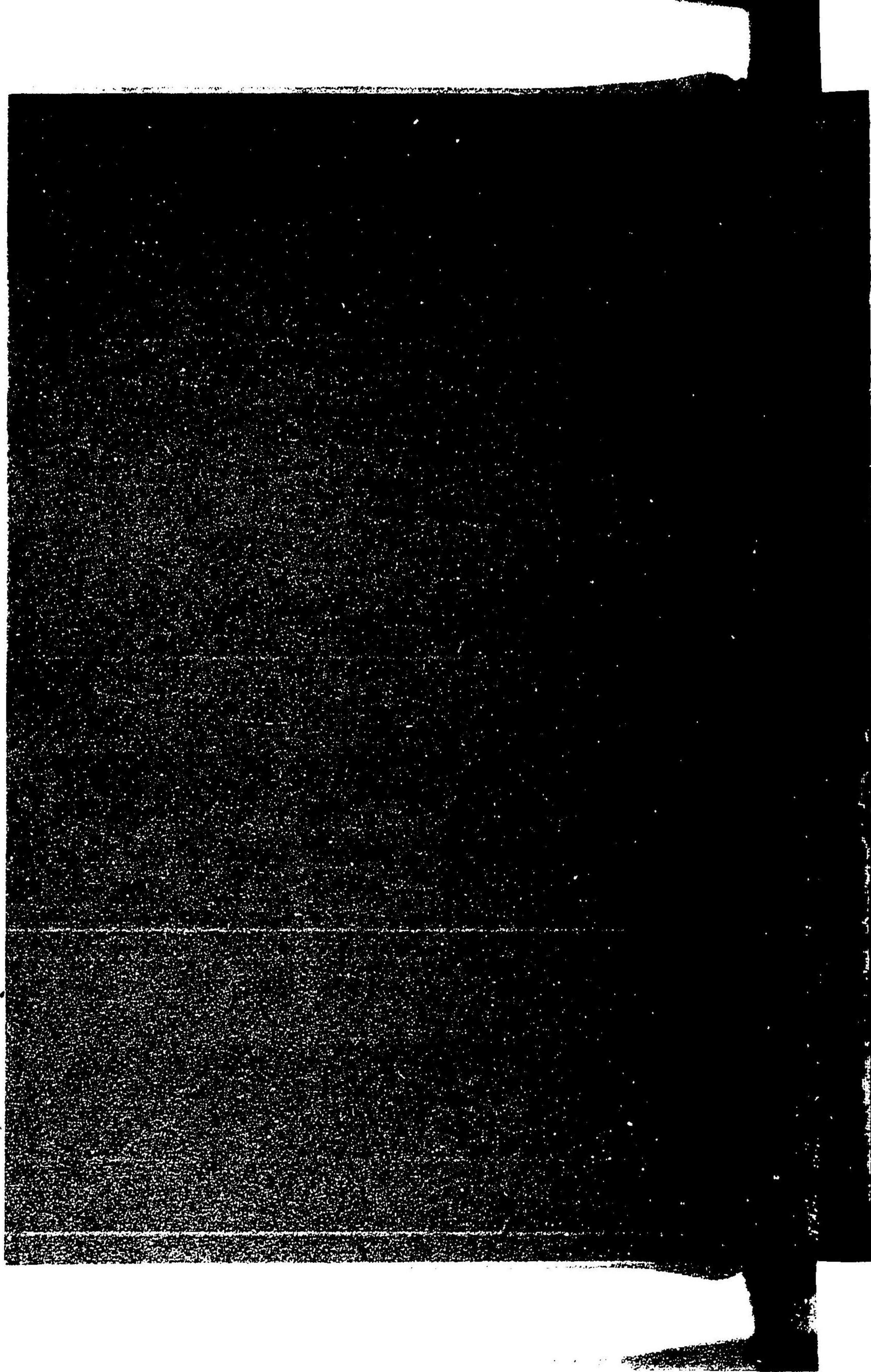
印刷所 東京市神田區三崎町三丁目一番地
有信堂

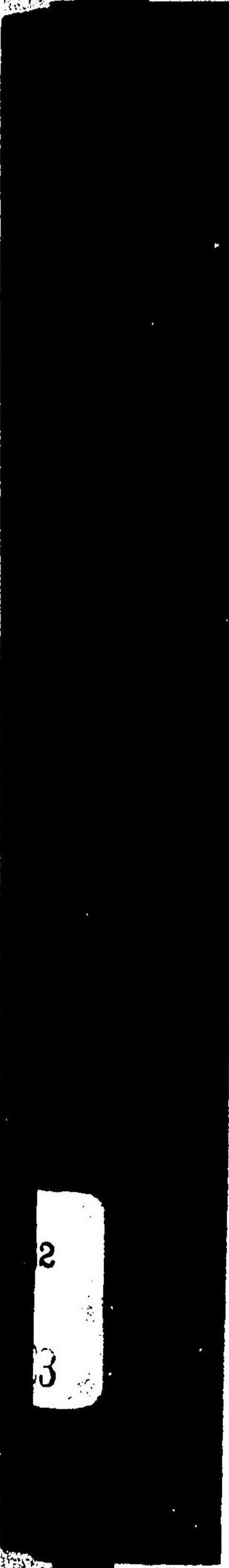
發行所

東京市神田區明神下

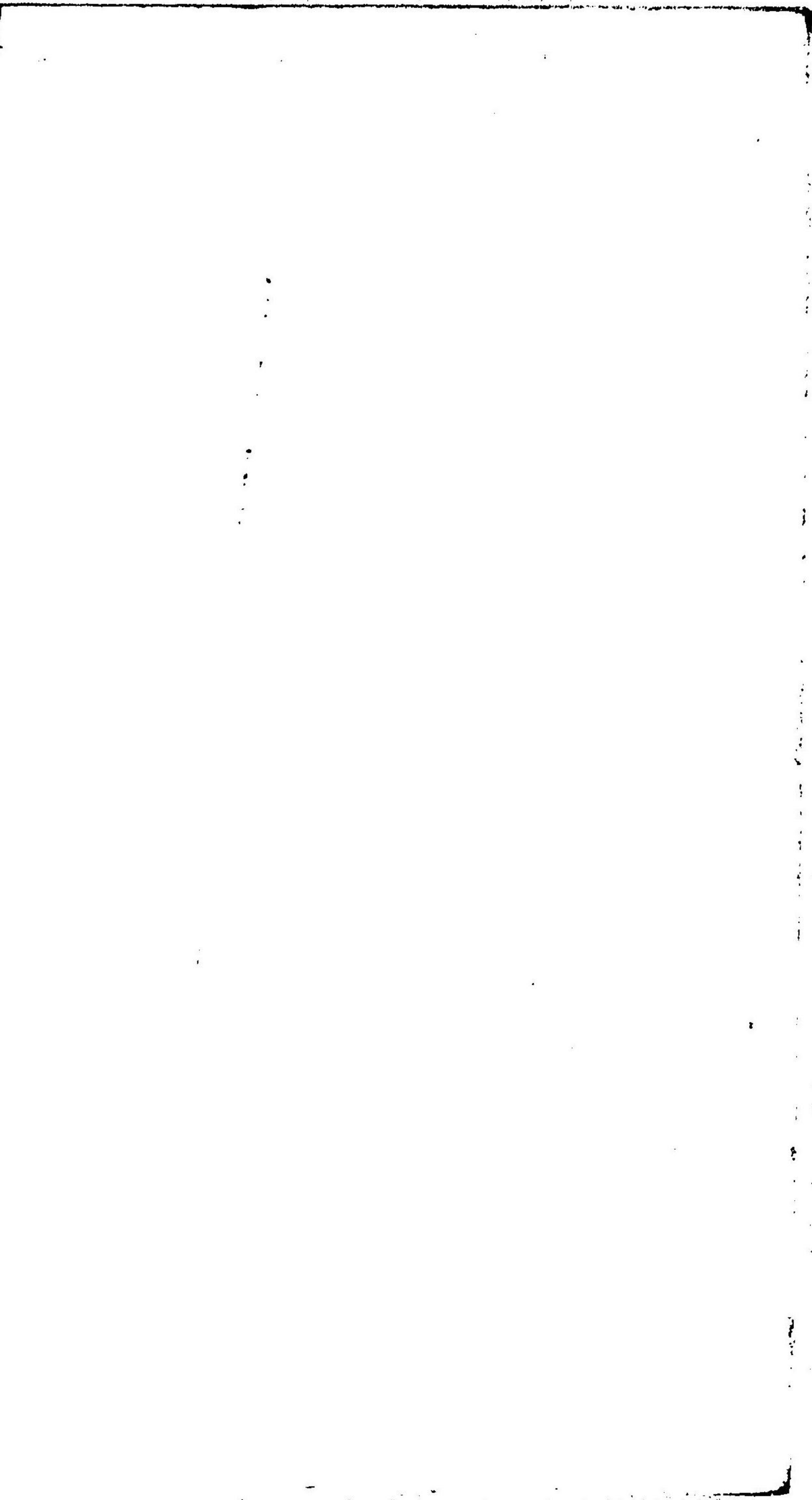
木下書店

2A-14





2
3



惟然坊句集

廣瀨惟然坊

国立国会図書館

086902-000-8

特52-283

惟然坊句集

惟然/著

M40

DBE-0008



特

2

